

祖父母が暮らす岡山県・奈義町は、総合病院がない。「町外の病院は行くのが大変で…」と、医療を“諦める”ことが日常になっている地域だ。ある冬、私自身が祖父母の家で熱を出した時のこと。病院が見つからず、診断も受けられないまま熱に苦しんだ。そんな私を前に祖父母は「田舎だから仕方ない」と寂しげに笑った。その言葉と表情が、今でも心に引っかかっている。“遠い”というだけで、大切な人が医療を諦めなければならない現実。

その日から、私は問い続けた。「あの不安を、誰にも味わわせたくない」。たどり着いた答えの一つが、遠隔医療だった。距離にとらわれず、人と人、心と心をつなぐ技術。それは、医療を「選べるもの」へと変える力を持っている。

私は ICT に強く、人との対話が好きだ。その強みを活かして、もっと“当たり前”に医療へアクセスできる未来を創りたい。そう決意してから、国内外の論文を読み、自分なりに研究も始めた。現在は奈義町でアンケートを取り、地域の声を集めている。

さらに今夏、広島県・大崎上島とオーストラリア・タスマニアでもインタビューを実施し、島内の診療体制や通信環境、住民の医療ニーズを肌で感じながら、離島医療の国際比較を行う予定だ。タスマニアは高齢化と過疎が進んでおり、日本のへき地医療とも共通点が多い。日本の遠隔医療のどこが良くて、どこが惜しいのか。机上の知識だけでなく現場の声を集め、触れることで、設計や制度作りの出発点になると考えている。そうすることで自分の目指すべき姿がきっと見えてくるはずだ。

多くの論文や事例を通して、世界のどこにも“壁”があると知った。制度の違い、技術の遅れ、信頼の不足…。それでも立ち向かう大人たちがいる。例えば三重や大崎上島では、限られた医療資源の中でオンライン診療が導入されている。地域住民と行政、エンジニア、医療人が一丸となって「誰かの未来のために動いている」ことに感激した。そんなカッコいい大人に、私もなりたい。

医療は、生活を守る手段であり、自分らしく生きるための“選択肢”でもある。誰もが自宅で健康を管理し、地域全体の健康水準が高まれば、それはやがて地球全体の福祉にもつながるはずだ。大切なのはチームワーク。技術だけの話ではなく、心あるケアこそが、遠隔医療を支えるもう一つの柱だ。

さらに、世界には、医療どころか電気も安定して届かない地域がある。紛争も災害もある。私は日本の地方から学び、地球全体に応用できる仕組みを創りたい。その挑戦は、きっと地球の未来を守ることに繋がっていく。「私が、変える」という覚悟と、「みんなで、変える」と一緒に悩み、もがきたいという未来への思い。この二つを胸に、地域医療の新しいカタチをデザインし、創っていききたい。

(1132 字)

国土交通省（2020）令和 2 年度スマートアイランド推進実証調査 TRIMet バーチャル鳥羽離島実証プロジェクト(2024 年 12 月 25 日取得)

<https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/chirit/content/001380934.pdf>

津田万里・森屋宏美・浦野哲哉（2021）世界と日本の遠隔診療の現状と遠隔診療に対する学生教育の展望 医学教育 52（3）271–277

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/mededjapan/52/3/52\\_271/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/mededjapan/52/3/52_271/_pdf/-char/ja)

DOI: [https://doi.org/10.11307/mededjapan.52.3\\_271](https://doi.org/10.11307/mededjapan.52.3_271)(2025 年 3 月 28 日取得)

渡部公揮 中国新聞（2023）8 月 19 日号 大崎上島町の特養、オンライン健康診断 医療  
充実へ東京の診療所と結ぶ 特養みゆき

<https://www.chugoku-np.co.jp/articles/-/348043> （2024 年 12 月 28 日取得）